

看護研究 第48巻 総目次

2015年(第1号～第7号)

〔表示は、題名・著者名・(号)掲載ページ〕

〔特集〕

第1号◆看護研究から政策をうみだすために

(企画：緒方泰子、深堀浩樹、丸 光恵)

A Preamble to Shaping Health Policy through Nursing Research. Patricia A. Grady, Ada Sue Hinshaw. (1) 8-15.

【翻訳】『Shaping Health Policy through Nursing Research』に寄せて。Patricia A. Grady, Ada Sue Hinshaw / 翻訳：緒方泰子、深堀浩樹。(1) 16-22.

NINR とは何か？ その歴史と看護研究における役割。前田留美、深堀浩樹、丸 光恵。(1) 23-31.

政策につながる看護研究の動向と今後の展望—退院支援の研究を例に。坂井志麻。(1) 32-42.

政策につながる看護研究の実践—少子化社会における妊娠・出産・子育てにかかわる政策に向けた研究。福島富士子。(1) 43-51.

日本の看護系大学院における教育者・研究者の養成—看護学教育者、研究者養成につながる行政官の活動例。石橋みゆき。(1) 52-63.

【インタビュー】看護学研究者に対する国会議員からの期待。石田昌宏、深堀浩樹。(1) 64-70.

第2号◆遠隔看護とイノベーション

在宅医療の新展開

(企画：川口孝泰)

遠隔看護の現在と在宅医療におけるその役割。川口孝泰。(2) 104-111.

遠隔看護の歴史と研究の変遷。豊増佳子。(2) 112-128.

遠隔看護におけるデバイス開発と応用事例。荒木大地、浅野美礼、川口孝泰。(2) 129-135.

遠隔看護の取り組み事例—慢性疾患患者のサポート。日向野香織、柴山大賀、林啓子、川口孝泰。(2) 136-144.

遠隔看護のクラウドベースでの実用化をめざして。川口孝泰、豊増佳子、西山直美、内藤隆宏。(2) 145-151.

訪問看護における遠隔看護への期待。林啓子。(2) 152-158.

遠隔看護における情報教育の整備と看護師の役割。内藤隆宏、浅野美礼。(2) 159-167.

第3号◆医療権力論

看護界・医療界はいま

(企画：中木高夫)

看護師は医療という権力装置の尖兵であるという自覚をもつべきである—医療権力論, revisited & reflected. 中木高夫。(3) 216-221.

看護師の批判的思考を研究に活かすために—日本の質的看護研究における理論の活用可能性。谷津裕子。(3) 222-229.

生体肝移植ドナーの語りにみる“健康体”という幻想。永田明。(3) 230-235.

助産師の語りにみる“母乳育児推進”という権力装置。濱田真由美。(3) 236-242.

小児気管支喘息にまつわる言説と子どもの体験。深谷基裕。(3) 243-251.

“更年期”をめぐる言説に戸惑う女性たち。新田真弓。(3) 252-259.

第4号(増刊号)

大学院で学ぶ意味

新たな看護を創るために

(企画：『看護研究』編集室)

〈博士修了の立場から〉

大学院における研究のプロセスと学び。内川洋子。(4) 310-313.

臨床での経験と研究、そして研究結果を実践で活用するための研究へ。菊地悦子。(4) 314-317.

東日本大震災がきっかけとなった研究活動。佐藤眞理。(4) 318-321.

新たな知の創造。山内朋子。(4) 322-326.

〈修士修了の立場から〉

リカバリー志向の共同意思決定 Shared Decision Making との出会い。青木裕見。(4) 327-330.

大学院で学ぶことから展開する知識の応用と研究に対する自覚—修士論文の研究の進行過程を辿りながら。新裕紀子。(4) 331-334.

看護研究から問題解決の方法を学ぶ。藤原美保。(4) 335-338.

“わからないこと”を考え続ける—その原点としての修士論文。細野知子。(4) 339-342.

人生に面白味を与えてくれた大学院。三田村裕子。(4) 343-346.

スタートライン—看護師が働きやすい環境を考え続けた。横山麻美。(4) 347-350.

実践に根ざした知を創る。吉行紀子。(4) 351-354.

第5号◆NP教育の成果を探る 自律した Health Care Provider をめざして (企画：草間朋子，村嶋幸代)

大学院修士課程における診療看護師(NP)養成教育と法制化。藤内美保，山西文子。(5) 410-419.

〈NPのアウトカムとエビデンス〉

①一般病院のケース

プライマリケア領域における周手術期アウトカム，患者満足度，看護師からの評価—診療看護師(NP)を導入して5年目の事例。塩月成則，藤内美保，藤本響子，甲斐かつ子，宮内信治，小野剛志，小寺隆元。(5) 420-425.

診療看護師(JNP)の活動がもたらす影響—長崎医療センターでの臨床研修をととしての成果。本田和也，和泉泰衛。(5) 426-429.

周術期領域における診療看護師(NP)の活動と成果。吉田弘毅，伊藤 豊。(5) 430-435.

チーム医療「急性期早期離床チーム」における診療看護師(NP)の役割。平田尚子，菊野隆明。(5) 436-439.

消化器外科病棟における診療看護師(NP)の役割と成果。飯野雅子，鈴木英之。(5) 440-448.

②在宅医療・訪問看護のケース

診療所における診療看護師(NP)の活動と成果。長谷川健美，山田顕士，福田広美。(5) 449-451.

訪問看護ステーションにおける診療看護師(NP)導入前後の実態調査—訪問看護関連報酬に焦点を当てて。光根美保，守永里美，藤内美保，宮内信治，阿南みと子，財前博文。(5) 452-455.

③介護老人保健施設，重症心身障がい児(者)施設等のケース

介護老人保健施設における診療看護師(NP)の活動成果。廣瀬福美，小野美喜，小寺隆。(5) 456-458.

重症心身障がい児(者)施設における診療看護師(NP)の成果。後藤 愛，高野政子，佐藤圭右。(5) 459-462.

④看護の視点からみたケース

高齢者医療施設における診療看護師(NP)の活動成果。平野 優，町屋晴美。(5) 463-467.

〈座談会〉診療看護師(NP)の新たな発展をめざして—活動の成果とこれからのビジョン。草間朋子，村嶋幸代，真

田弘美，深井照美。(5) 468-477.

The Contributions of Research in the Development of Nurse Practitioners in the United States. Jamesetta A. Newland.(5) 478-486.

第6号◆現象学を語る

(企画：『看護研究』編集室)

【対談】現象学とグラウンデッド・セオリー。西村ユミ，山本則子。(6) 525-535.

【ディスカッション】大学院生からみた現象学とグラウンデッド・セオリー—対談に参加して。西村ユミ，山本則子，坂井志織，棚川綾子，細野知子，村上優子，石井絢子，城島華子，藤井文香，齋藤凡，西川美代。(6) 536-547.

【対談・ディスカッションを終えて】

対談からうまれた3つの「問い」。西村ユミ。(6) 548-550.
研究方法の垣根を越え，「看護学の知」の山をめざす。山本則子。(6) 551-553.

【臨床実践の現象学会第1回大会大ラウンドテーブルディスカッション「一緒に『現象学する』」より】

1. 現象のリアリティを記述する

現象を理解するための新たな視点や概念を抽出し，それを提案する。萱間真美。(6) 554-557.

現象学的な質的研究の方法論。村上靖彦。(6) 558-566.

2. 事象と現象学との関係性

現象学的な質的研究の多様性。村上靖彦。(6) 567-570.

エピソード研究で「現象学」を使う意味。大塚 類。(6) 571-574.

3. 質的研究の正当性

エピソード研究の妥当性とは何か。大塚 類(6) 575-577.

現象学的看護研究の立場から。細野知子。(6) 578-580.

研究の正当性とは何か。萱間真美。(6) 581-583.

第7号◆査読を考える

査読ガイドラインの構築に向けて

(企画：萱間真美)

論文の査読ガイドライン構築に向けて—誰のためのガイドラインか。萱間真美。(7) 642-647.

【座談会】査読ガイドライン構築に向けて何が必要か。小泉俊三，法橋尚宏，山本則子，萱間真美。(7) 648-660.

〈海外の動向から考える〉

【翻訳】優れた研究のための触媒となる EQUATOR ネットワーク。(7) 661-664.

【翻訳】*Journal of Nursing Education* 査読者のためのガイドライン。(7) 665-669.

〈英文誌／和文誌の査読から考える〉

Cancer Nursing 査読者としての経験から—投稿ガイドラ

インを中心に、丸光恵. (7) 670-675.
 英文誌と和文誌の査読の経験から、半澤節子. (7) 676-694.
 投稿者・査読者・編集者の視点から査読ガイドラインの意義を考える、江藤宏美. (7) 683-689.
 〈学会の動向から考える〉
Japan Journal of Nursing Science 編集委員長としての経験に基づく査読に関する私見、グレッグ美鈴. (7) 690-694.
 日本看護学教育学会の査読の動向、秋元典子. (7) 695-699.
 『家族社会学研究』の査読システムと査読ガイドライン、池岡義孝. (7) 700-704.
 〈査読を受けた経験をいま査読者としてどうかするか〉
 著者と査読者の相互作用、西垣昌和. (7) 705-708.
 論文査読に必要とされるものは何か、跡上富美. (7) 709-714.
 投稿経験から考える査読のプロセスと査読者の役割、河野あゆみ. (7) 714-718.

〔原著〕

住民との協働を基盤とした活動の保健師の行動意図に影響する要因の構造、山谷麻由美、中尾八重子、竹口和江. (4) 386-401.

〔特別記事〕

【第34回日本看護科学学会学術集会／(株)医学書院共催ランチョンセミナーより】事象が分析方法を教えてくれるとは？—現象学的研究入門、西村ユミ. (3) 264-273.
 臨床を中心に考える看護研究者のあり方とは—クリティークとシステムティックレビューの重要性、植木慎悟. (4) 356-364.
 【文化人類学と看護学—質的研究をめぐる—】文化人類学からみた看護領域における質的研究の特殊性—なぜカテゴリーが好まれるのか？、磯野真穂. (4) 366-374.
 【文化人類学と看護学—質的研究をめぐる—】看護学における質的研究の独自性と課題—文化人類学者の問いが突きつけるもの、田辺けい子、水寄知子. (4) 375-382.
 看護における知的財産活動の活性化のために—看護系大学における知的財産活動、丞村 宏. (5) 488-497.
 看護研究のための文献レビュー—マトリックス方式の意義と実際、安部陽子. (6) 586-595.
 看護における end-of-life care 教育システムの再構築への提言、スウェーデンにおける予想される死への看護職による死亡確認の現状から、川原礼子、佐々木明子、齋藤美華、坂川奈央. (6) 596-604.
 よりよいヘルスケアの実現に向けて道筋をリードする—

IMHL を通じて世界へ、Leslie Breitner / 翻訳：緒方泰子、湯本淑江. (7) 720-726.
 特別養護老人ホームにおけるミューチュアル・アクションリサーチ—自己革新のプロセスをたどる実践研究手法の適用、小山千加代. (7) 727-735.

〔研究ノート〕

現象学的研究をめざす人に具体的な手掛かりを提供—『現象学的看護研究』を読んで、山本則子. (2) 172-177.

〔研究報告〕

高齢者のいわゆる「おむつ皮膚炎」に対する治療アルゴリズムの提案、常深祐一郎、福田亮子、出口亜紀子、川島眞. (2) 180-188.
 中高年看護師の職業的キャリア成熟度の特徴と関連する要因、近藤暁子、小泉麻美. (3) 276-284.

〔連載〕

混合研究法入門

- ①混合研究法コミュニティの多様性、抱井尚子. (1) 76-83.
- ②混合研究法の歴史的発展と現状、抱井尚子. (2) 190-198.
- ③混合研究法の手続き(その1)、抱井尚子. (3) 286-291.
- ④混合研究法の手続き(その2)、抱井尚子. (5) 500-506.
- ⑤混合研究法デザインとその研究例(1)基本型編、抱井尚子. (6) 612-622.
- ⑥混合研究法デザインとその研究例(2)応用型編、抱井尚子. (7) 744-754.

Journal Watch —海外の看護学研究から学ぶ

- ①連載開始にあたって—何を海外の看護学研究から学ぶのか、深堀浩樹. (1) 86-87.
 看護の価値を主張するためには、大山裕美子. (1) 88-90.
- ②認知症患者を対象とする介入研究の難しさ、佐藤可奈. (2) 200-202.
 非薬物療法の効果を示すために、廣岡佳代. (2) 203-205.
- ③オランダの研究から日本の看護師の専門的能力開発のあり方を考える、井尻弓子. (3) 292-295.
 申し送りにみる文化、佐藤可奈. (3) 296-298.
- ④看護学生への災害時の看護管理教育を考える、小玉淑巨. (5) 508-511.
 米国の看護研究チームの活動を知る—項目反応理論モデルを用いた二次分析、那須佳津美. (5) 512-514.

- ⑤理論的根拠のある情報・知識を効果的に広めていくための教育プログラムとは、奥村朱美。(6) 624-626.
量的研究におけるアウトカムと説明変数の設定の難しさ、森陽子。(6) 627-629.

UCSF で看護研究を学ぶ

- ①フルブライト留学までの道のり、齋藤真希。(1) 92-95.
②サンフランシスコでの留学生活、齋藤真希。(2) 206-208.
③博士課程でのコースワークと UCSF における多様性、齋藤真希。(3) 300-302.
④倫理審査委員会への研究計画申請と学生生活、齋藤真希。(5) 516-518.
⑤コースワークとしての研究実施、齋藤真希。(6) 630-633.

- ⑥研究を伝えるためのさまざまな取り組み、齋藤真希。(7) 756-758.

英語論文を書くということ

- ①なぜ英語で論文を書くのか一序に代えて、余 善愛。(6) 606-611.
②英語論文を書く過程、余 善愛。(7) 736-743.

〔書評〕

- 『ナラティブホームの物語 終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ』ナラティブー患者の人生の物語へアプローチするための臨床的しかけの実践書、工藤由美。(3) 285.